

有地 淑羽（当会世話人）

田中正先生訃報のこと

長谷川さん情報をありがとうございました。

3月の反核ネットの例会で「どうして核兵器は無くならないのか？」をあれからずっと考えていて、アメリカの軍事予算100兆円（日本の国家予算と同じ額）。この軍事マネーで必死にお金儲けする人たちに立ち向かうのには「9条」なのだ和田中先生の書かれた湯川秀樹の言葉を思い返していたところでした。

私のパソコンのデスクトップにずっと置いてある田中先生の文章です。

(2019/4/10)

* * * * *

“核時代を超えるビジョンを！” —核兵器廃絶と憲法九条を結ぶ

田中 正（京都大学名誉教授）

2005年はヒロシマ・ナガサキの惨禍から60年、原水爆と人類の危機を訴えたラッセル・アインシュタイン宣言から50年を迎え、7月下旬には第55回パグウオッシュ会議が被爆地、広島で開催された。それを機にわれわれは同会議に「日本の科学者からのメッセージ」を送った。このメッセージに託したわれわれの願いは、今日では忘れ去られたかつての科学者京都会議（1962-84）の存在とそれに結集した湯川秀樹博士（1907-81）ら日本の大先輩たちが、人類がかつて経験したことのない「科学の時代」と「核時代」の矛盾を直視して、核時代を超える唯一のビジョン、「もはや国ごとの軍備を必要としない平和、かつ公正な世界システム」の実現への端緒を、戦争の放棄と戦力の不保持を誓った日本国憲法の平和主義に見出した事実を内外に訴えることにあった。（『湯川秀樹著作集5』、岩波書店）このビジョンは過去、人類が戦争のたびに、無限にくりかえし訴えてきた悲願や理想論とは違って、いまや「原子爆弾が文明の破壊に導くか否かは、これが出現した地球的世界に適応できるか否かに関わる」、まさに地球上の「種としての人類」の生き残りがかかった、核時代のきびしい事実認識に立っている。

そして冷戦終焉後の今日、憲法九条をめぐる、「専守防衛、最小限防御のための自衛力、軍事力」を容認する構想が様々に登場しているが、「科学・技術革命」、「軍事革命」、「宇宙防衛」、・・・が叫ばれる核時代にあつて、それは未来に対していかなるビジョンを持ちうるか“備えあれば憂いなし”は時代錯誤の虚言、その先には果てしない「ハイテク・軍備競争」と「緊張激化」、さらには“先制予防攻撃こそ最大の防御”という破局のゴールが待ち受けている。反対に「核兵器廃絶、武力の放棄」のビジョンは、今日、内外のNGOの献身的活動や世界に広がる非核地帯の出現となってわれわれを勇気づけている。

（「非核の会」ニュース2005. 11）